農と福祉の連携による豊かな農山村の創出

農林生産学科　准教授
山岸　主門

研究成果の概要

「社会の中で弱い立場にある人にとって暮らしやすい場は，すべての人にとっても豊かに暮らすことができる場（農山村）である」という考えのもとで，本研究では，主に①障害者，②高齢者，③子どもに注目して，農と福祉を結ぶための活動・調査を行った。

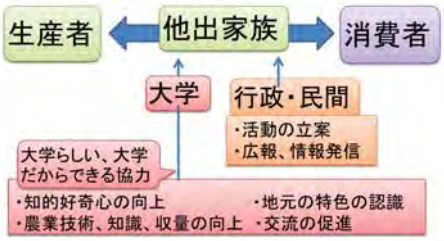
① 障がい者（修学・就労支援等）

実状を正確に把握するために，県内の６つの養護学校・特別支援学級・福祉施設に定期的訪問し，サツマイモやブルーベリー等の栽培活動を一緒に行った。「農作業を行うことで積極的になれた」「青空の下で作業するのは気持ちいい」「動くことは好きなので毎日充実している。体力もついた」「農業には一つのパターンではなく色々な作業があるから楽しい」「農家での作業は毎日感謝され，喜んでもらえることが嬉しい」といった声に出会い，記録することができた。来年度以降，活動・調査を継続する上でもっとも大切な信頼関係を構築できたことが何よりの大きな成果である。

さらに，農業生産科学部門に勤務する知的障がい者2名に協力頂きながら，「障がい者に適した農作業の抽出・評価」を目的に，日常の農作業について調査を実施した。調査項目を試行錯誤しながら選定し，作業環境（場所），主な注意の対象，作業工程に加え，作業姿勢，手の使用，巧緻性（手先の器用さ），危険度，難易度を各5段階で評価した。きつい姿勢や注意配分数・難易度などを減少・低下させるために，個別の障がい者に適した作業手順や指導方法などの改善策をいくつか見出すことができた。

②高齢者（生涯教育等）

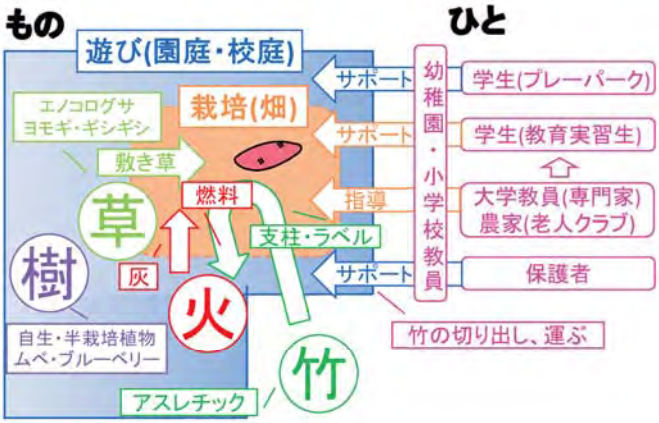
高齢者中心の地域の方との農作業体験活動を松江市西長江町，松江市秋鹿町，松江市八雲町，出雲市斐川町，安来市宇賀荘町，吉賀町柿木村等で実施するなかで，地元の生産者が核となりながら，近隣在住の他出(別居)家族が消費者との連携を支え，そこに行政・民間団体，大学等が適切に関わる仕組みが提案できた。



生産者と消費者を他出家族・大学等が結ぶ

② 子ども（環境・食農教育等）

地域資源（ひと・もの）の循環を意識した環境・食農教育活動を３つの幼稚園と２つの小学校や本庄総合農場等で行い，そこに参加する「子ども」と「子どもを見守る立場である大人」に注目する中で，畑内外の地域資源（ひと・もの）である樹木や竹，草等を農作業活動に取り入れることで，「知る(知識の習得)」から「感じる(楽しい・面白い)」への変化，畑や栽培作物だけでなく周囲の環境へも目を向けるきっかけづくり，そして多くの人が学校，家庭，地域をつなぐ場に参加できることが確認できた。



学校・幼稚園などでの地域資源(ひと・もの)の活用例

社会への貢献・その他

中山間地域に存する地域資源（ひと・もの）を積極的に活かしながら，農家を核として，行政・民間団体，障がい者施設，幼稚園・学校，大学等のそれぞれの立場を活かした連携が島根県内にいくつかの点として生まれた。これらの点と点を線に結ぶべく 2015 年 10 月に設立された安来市内の特定非営利活動法人の活動に参画し，2016 年度から地域に暮らす障がい者，不登校児，引きこもり，生活困窮者等も含めた多くの皆さんと食農教育・生活支援・学習支援・地域づくり等の活動の企画・運営を大学生らと支援していく予定である。